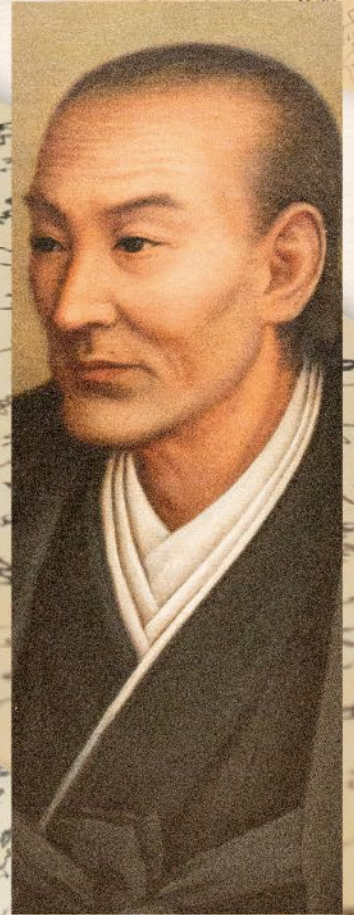




新発見!

緒方洪庵夫人



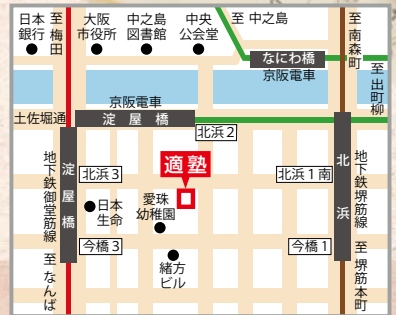
八重のてがみ

平成29年 適塾特別展示

会期 5/30(火) - 6/11(日)

会場 適塾 (史跡・重要文化財)
開館時間: 10時~16時
大阪市中央区北浜3-3-8
電話 06-6231-1970

入館料 一般 260円(140円)、高校生・大学生等 140円(80円)
※()内は20名以上の団体料金、要事前申込み、詳細はホームページ参照
小学生・中学生 無料 ※中学生以下の方は引率者が必要
大阪大学の学生 無料 ※要学生証提示



“良妻賢母”の知られざる素顔

蘭学者・緒方洪庵は著作や医業を通じて西洋医学の普及に大きく貢献する一方、大坂に開いた適塾で日本の近代化をリードする数多くの人材を育成しました。洪庵の輝かしい功績は、妻・八重の存在を抜きに語ることはできません。病弱な洪庵を献身的に支え、塾生からは実母のように慕われました。実子に対しても、洪庵が幼子を残して先立った後は女手一つで育て上げ、息子たちは医学・語学・法学の各方面で

活躍しました。このように、八重の人物像は“良妻賢母”として、後世の人々によって理想化されてきました。しかし最近、大阪大学適塾記念センターが発見した八重自筆の書状から、これまでのイメージとは違った八重の側面が浮かび上がってきました。そこで今回の特別展示では、八重の生涯を振り返るとともに、新発見のてがみからこれまで知られていなかった八重の素顔に迫ります。

夫・洪庵の急死の顛末を書き留めた

おおさかしゅったつちやくふごにつきおぼえがき

「大坂出立着府後日記覚書」

八重は摂津国名塩村（現・西宮市）で医師・製薬販売業を営む億川百記の長女として文政5年（1822）に生まれました。百記が師事した大坂の蘭学者・中天游の下で学んだ洪庵と、弘化2年（1845）に結婚しました。洪庵が大坂で医業を始め、適塾を開いたのもこの年でした。八重の献身的な支えもあり、洪庵の名声は江戸にまで届き、文久2年（1862）には幕府奥医師に迎えられます。しかし江戸での暮らしは心労多く、洪庵は翌年6月に急死します。八重は「大坂出立着府後日記覚書」にその一部始終を書き留めています。筆致は冷静さを装いながらも、誤字脱字が見受けられ、動揺する心が窺えます。

「大坂出立着府後日記覚書」緒方八重 文久3年（1863）
（大阪大学適塾記念センター所蔵（緒方富雄氏旧蔵））



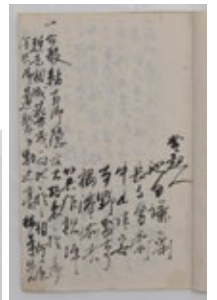
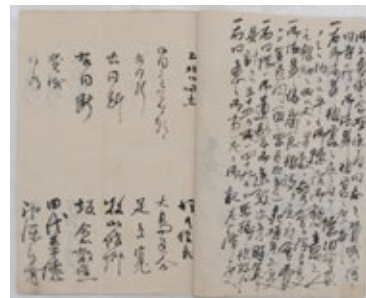
八重を敬慕する適塾門下生が示す哀悼の意

おがたごいんぎよさまいはつこうりんじごうまいほうじかいじょう

「緒方御隠居様遺髪高林寺合理法事廻状」

洪庵に先立たれた八重は、父の励ましもあって子どもたちの養育に心血を注いでいきます。特に息子には洪庵を手本に教育し、3人をヨーロッパに留学させました。また弟子たちとの交流も続き、福沢諭吉は大坂に来るたびに八重への挨拶を欠かさなかったそうです。晩年は洪庵が種痘事業の拠点とした除痘館跡に隠居し、明治19年（1886）にこの世を去りました。遺骨は洪庵の遺髪を納めた大阪の龍海寺（北区）に、遺髪は洪庵の遺骸が眠る東京の高林寺（文京区）にそれぞれ埋葬されました。葬儀や遺髪埋葬時の法事には、多くの弟子たちが駆けつけました。

「緒方御隠居様遺髪高林寺合理法事廻状」池田謙斎ほか 明治19年（1886）
（大阪大学適塾記念センター所蔵（緒方富雄氏旧蔵））



洪庵が詠んだ和歌短冊を貼った屏風から発見

おがたやえしよじょう

「緒方八重書状」

八重の“良妻賢母”像は、主に彼女を慕う弟子や親族たちの証言によって伝えられてきました。それゆえややもすると、その姿は完璧すぎるくらいがありました。そんななか、「緒方洪庵和歌貼交屏風」の下張り文書（骨組の補強に使用された反故紙）から、八重が書いたてがみが新たに発見されました。そこには八重の感情も表現されており、人間味あふれる側面が浮かび上がってきます。

「緒方八重書状」（「緒方洪庵和歌貼交屏風」下張り文書）緒方八重 年未詳
（大阪大学適塾記念センター所蔵（緒方裁吉氏旧蔵））

